



企画にあたって

寺島正浩

(医療法人社団 CVIC 理事長)

心臓画像診断は、最近10年間で大きく進歩しました。心臓画像診断の進歩により、これまで診断困難であった疾患が、正確に診断可能となり、治療方針に大きな影響を与えるようになってきました。一方で、新たな治療法の開発や疾患概念の推移とともに、心臓画像診断に期待される内容も変化しつつあります。単一モダリティではなく、いくつかのモダリティを組み合わせるマルチモダリティ画像診断の取り組みは、すでに実地臨床で診断に応用されています。これからの循環器診療には、それぞれのモダリティの特徴や使い分けを理解して、循環器診療に組み込んでいくことが求められつつあります。

「何を診るためにどの画像診断が最適なのか？」の答えにたどり着くには、それぞれのモダリティでどこまで診断可能なのが重要になります。また、画像診断から得られる膨大な情報は、AI（人工知能）の進歩とともに、循環器診療での精密医療（プレジジョン・メディシン）の切り札として期待されています。今後は、AIを活用して、より正確な心臓画像診断がより短時間で可能となる日が近付いてきています。

本特集では、それぞれの画像診断の第一線の先生方にご協力いただき、「現状で心臓画像診断がどのように臨床応用されているのか？」を、将来の可能性まで言及して、わかりやすく解説いただいています。本特集が、読者の皆さんの心臓画像診断の現状と将来を理解する一助となれば幸いです。